また異世界へ

ローズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
また異世界へ

【Ｎコード】
Ｎ６２８８Ｘ

【作者名】
ローズ

【あらすじ】
嵐と響也の二人が突然異世界に。
嵐は一度異世界に来た様なことを言っている。響也は異世界に興味津々でちょっと不安。
この世界には魔物いる。そんな中で二人が頑張るというお話になります。

【面白く読んで頂けるように頑張ります】

プロローグ

「嵐兄ちゃーん！」可愛らしい少年が呼んでいる。
「何だ？響也」小さな白い犬をを肩に乗せている青年が振り返る。
「昨日発売された、最新巻の異世界物語とても面白かったよ」響也は続きが見たいなと言っている。
「ありがとう。まぁ、楽しみにしてろよ」
響也はうんうんと強く頷く。

「じゃあ、特訓をしましょう」響也は急に走りだす。
「おい。走らなくてもいいだろ」
「嵐お兄ちゃんに追いつきたいから～」
「分かったよ」俺も駆け出す。

目的地に着いた俺たちはストレッチを念入りにしていた。特訓と言ってもただの組手だ。俺は白い犬のラウをおろした。

「それじゃあ始めるか」
「はい！」
組手は始まった。まずは響也が拳を俺に向けて放つが、俺は避けながらその腕を持ち、地面に軽く叩きつけた。
「はぁ～。やっぱり強いです」
「お前もなかなか良かったと思うぞ」
「そうですか？」響也は照れながら寝転がっている。
「もう一度お願いします」響也が起き上がる。
それから、陽が暮れるまで組手をやっていた。

「はぁはぁ……。疲れましたね」響也は倒れこんでいる。
「そうだな」と言いながら、息を乱していない嵐を見て響也は「

流石です」と思った。
響也が息を整えたのを確認して
「それじゃあ、ぼちぼち帰ろうか？」嵐が尋ねる。ラウが嵐の肩に飛び乗る。
「はい、帰りましょう」

嵐達が立って、家へと帰ろうと横へ並ぶと、その瞬間嵐達の足下が突然光り始めた。
嵐達は驚いていた。そして、そのまま光に飲み込まれた。

1話

「…んぅ……」響也はゆっくりと目を開けた。
響也の目に映ったのは見たことのない草や木々だった。響也は何が起こったのか、分からなかった。
「ここは……何処だろう…」

響也は嵐がいないことに気付き、辺りを見渡した。しかし、あるのは木や草だけ。響也は嵐を見つけるため、歩き始めた。

「嵐兄ちゃーん…嵐兄ちゃーん…」いくら叫んでも何の反応もなかった。響也はとても不安になった。
「ガサガサ…ガサガサ……」
「！！」後ろの背の高い草を掻き分ける音がした。
「…嵐…兄ちゃん？」響也は恐る恐る後ろを振り返る。

だが、出てきたのは嵐ではなく、人間でもなかった…。そこにいたのは、牙が長く体が赤く虎のような姿を生き物だった。それに虎よりも一回りも二回りも大きかった。

「ガルルゥ……ガルルゥ～」赤い虎はこちらを今にも、襲おうとしていた。
「……うぅ…う……」響也は逃げたくても逃げれなかった。

突然、赤い虎が飛び掛かった。響也はその勢いで尻餅を着いてしまった。響也は「兄ちゃん！」と目を瞑りながら心の中で叫んだ。

・・・・・・・・・・・・・。

あれ？と思いながら目を開くと、目の前に大きく開いている虎の口が見えた。
「わっ！」響也は後ろに飛び退いて木に頭をぶつけた。
「痛い……。あれ？僕生きてるの？」
そう考えていると赤い虎は腹の方から血を流しながらドスンと倒れた。
「響也！大丈夫か？」急いで駆け寄って来る嵐が見えた。
「おい！大丈夫か？」嵐は響也の顔を覗いた。
「うん…大丈夫」
「良かった」嵐は胸を撫で下ろした。
「嵐兄ちゃん、あれは何？」
「あれはレッドタイガーと言う魔物だな」
「ま、魔物？」響也はびっくりしている。
「あぁ、分かっていると思うがここは俺たちがいた世界ではない。いわゆる…異世界と言う場所だな」
「異世界？」
「いや、信じられないよな…」
「信じるよ！」その言葉に嵐は驚いた。
「そ、そうか」嵐は安堵した表情をした。
「響也。ここはな、俺が話していたあの話なんだよ」
「えっ、ホント？」
「本当だ」

それから、響也にこの異世界のことについて教えた。この世界には沢山の種族が住んでいることや、魔法が存在していることなど。いろいろなことを教えた。

「響也、この世界には沢山の魔物がいる。そのため、自分の身は自分で守らなければならない。だから、お前に身を守る方法を教え

たいと思うのだが？お前はどうする？」
「僕は嵐兄ちゃんのように強くなれるなら教えて下さい！」響也は強く頭を下げた。
「分かった。だが、俺をちょっとばかり厳しぞ」響也は頷いた。
「当分の間は、ここで暮らすことになるが、いいか？」
「はい、嵐兄ちゃんがいるから大丈夫です」
「まぁ、危なくなったらな。まずは、俺が知っている限りの知識を教える」
「まずは、魔物についてだ。魔物には魔獣と聖獣に分けられている。」
「魔物の中で大半は魔獣だ。魔獣は人々に危害を加えてくる。聖獣はこちらからちょっかいを出さなければ、敵対することは無い。例えば、このラウも一応聖獣だ」
「えっ、本当に？」
「あぁ、本当だ。神竜と言って、ＳＳＳランクの上のＥＸの上位に入るな」
「ＥＸランクって何？」
「ん～、さっきのレッドタイガーがＣランクぐらいだな」
「ラウって、そんなに強いの…」
「ガウガウ」ラウがどうだと言う顔をしている気がした。
「それから……。

「はぁ～、やっと終わりました。」響也は仰向けになっていた。
「一通りは教えたと思うから、明日からは魔法などの練習だな」
「分かりました～」
「では、食事にするか」

食事はさっきのレッドタイガーの肉や木の実を使った、料理だった。嵐兄ちゃんの料理はとても美味しかった。これから何があるか、ワクワクしている気持ちと不安な気持ちもあるが、嵐兄ちゃんとなら大丈夫な気がする。きっと大丈夫だと、思いながら料理を味わった。

次の日から魔法や獲物の捉え方などを教えた。響也は飲み込みがよく教えがいがあった。数ヶ月経ったくらいから、響也はCランクぐらいなら余裕で狩れるようになった。

数ヶ月後、
「さって、そろそろ街に行こうか」
「はい！」
「いろいろな物を見れるぞ」

嵐たちは、近くの街まで歩き出した。
「俺がいた時から、どのくらい経ったのだろうか」嵐は小声で呟いた。

2話

嵐たちは長い林道を淡々と歩いていた。途中、魔獣が出たが逆に返り討ちにしていった。たまに、集団で襲ってきたが今の響也では物足りないぐらい強くなっていた。だが、嵐の教えから慢心することなく、日々の修行に精を出していた。

それから程なくして森が開け、高い壁と門が見えた。その門の前にいる数人の兵士に嵐たちが話しかけた。

「すいません」

「なんだ？」一人の兵士がこちらを向いた。

「私たちはこの街に始めて来たので、いろいろと聞いてもよろしいでしょうか？」

「あぁ、ここはクラリスだ。の六大国の一つのだ」

「そうですか。えっと…物を売りたいのですが、どうすれば良いでしょうか？」

「それなら市場に行けばいいぞ」

「ありがとうございます。あと、宿は何処でしょうか？」

「それならギルドと割と近く、安い、リーエン亭が良いだろう」

「ありがとうございます」

「それでは、ようこそクラリスへ」嵐たちは兵士に会釈して門を通った。

嵐たちは素材を売るため、活気が溢れている市場に来た。

「響也、こういう所はいい値段で売れない限り、何度か回って一番高いとこで売るもんだぞ」

「はい、分かりました」響也は嵐の後ろを追いかけていた。

「ここが良さそうだ」嵐は一つの露店に足を運んだ。
「すいません」
「何だ？」男のドアーフが無愛想に応えた。
「これらを売りたいのですが？」嵐は品を見せた。
「つまらないものは買い取らねーぞ」ドアーフがこっちの品の量を見て驚いた。
「おお、凄い量だな」
「まぁ、いろいろと」
「これらはC・Bランクの素材だな」ドアーフがこちらをまじまじと見ている。
「それが何か？」嵐は淡々と言った。
「お前たちのギルドランクは？」
「ギルドランク？」響也が首を傾けた。
「ギルドランクとはな、ギルドの中で決められる位のことだな。ランクには上からA～Gまである。Aの上にはS・SSなどがある。上位ランクになると、色々な依頼を受けることができる」
「そうなんですか」響也は何回も頷いている。
「無視するな！お前らのランクは何かと聞いているんだ！」俺たちが無視したように話していたから、怒ってしまったようだ。
「俺たちはギルドすら入っていませんよ」その言葉にそのドアーフは驚いていた。
「で、いくらで買い取ってくれるのでしょうか？」
「あぁ、これだけの数なら…聖金貨二枚と金貨六枚と銀貨七枚と銅貨九枚と青銅貨五枚でどうだ」
「おっ、気前が良いな。もっと、安いかと思ったぜ」
「まぁな。本当にギルドに入ってないのか？」ドアーフは嵐に袋を渡した。
「入ってないませんよ。やっぱり入った方がいいのですか？」嵐は袋の中をよく確認していた。
「まぁ、いろいろなサポートが受けられるからな」

「へ～。やっぱりギルドに入ろうか」嵐は考えていた。
「お前達のこと気に入ったぜ。俺の名前はサーガだ。お前らの名前は？」
「うん、僕は響也。こっちが…」
「アルだ」
「えっ？」
「よろしくな。今日は鍛治屋を改装しているから市場で武具を売っているんだ。今度は鍛冶屋に来てくれよ」
街の地図を見せられて場所を教えてもらった。
「あぁ、よろしく。響也、行くぞ」嵐は踵を返して歩き始めた。
響也も慌てて追いかけた。
「何で、偽名を使ったの？」
「この前、説明しただろ？」
「そうだった…。あははは」
「おいおい、頼むぞ」
「分かってるって、兄ちゃん」
嵐は真名を使うと、面倒になるので偽名を使ったのだ。

それから、嵐たちは教えられた、リーエン亭にやって来た。
受付の女性に「すいません」と声を掛けた。
「何でしょう？」その女性は髪が金髪で長く、耳がとんがっていたのでエルフだと響也は思った。
「しばらく、ここで宿を取りたいのですけど、部屋は空いていますか？」
「はい、空いています。お二人でよろしいですか？」
「はい」

「お二人ですと、朝と夜の食事付きで、一日当たり銅貨七枚になります。よろしいですか？」
「はい、お願いします」
嵐は紙に名前とサインを書いて、そのエルフに渡した後、金貨二枚と銀貨一枚を渡した。
「では、こちらです」嵐たちはそのエルフについて行った。
そのエルフは一つの部屋の前に立つと。
「こちらです」と扉を開いた。
部屋は割と広くて、二つのベッドとイスと一つのテーブルがあった。
「それでは、こちらが鍵です」嵐は鍵を二つ貰った。その一つを響也に渡した。
「何かあったら、従業員にお申し付け下さい。それでは」エルフは扉を閉めた。
「さて、これからどうする？」嵐が響也の方を向いた。
「分かりません」
「じゃあ…響也、学校へ行け」
「えっ」
「一週間後に入試があるらしい。それを受けて来い」
「はっ？嫌ですよ」
「行けよ」
「何で行かなくちゃいけないの？」
「ん？何と無く？…まぁ～俺はギルドに入ろうと思うがな」
「納得行きませんよ」
「まぁ、いいだろ？」
「嫌ですよ」
「お前はまだ、この世界の読み書きが出来ないだろ？」
「嫌です！僕もギルドへ入りたいです」などと議論し合った結果、

読み書きが出来るようになったら、ギルドへ入っていいことになったのだった。

2話（後書き）

【　お金について】

青銅貨（十枚）≫銅貨（十枚）≫銀貨（十枚）≫金貨（十枚）≫聖金貨（十枚）≫神聖金貨

〈価値（日本円）〉

青銅貨・・・約百円
銅貨・・・約千円
銀貨・・・約一万円
金貨・・・約十万円
聖金貨・・・約百万円
神聖金貨・・・一千万円

どのお金も大きさ的には五百円より少し大きいぐらい。

3話

嵐は虚ろ虚ろとしながらベッドから足を下ろす。そのまま立ち上がって、光が差し込んでいるカーテンを開ける。嵐は太陽の光を全身に浴びて、やっと覚醒した。嵐はテーブルへ向かい、御茶っ葉を急須を入れ、魔法で出した湯を急須に入れた。しばらくして、嵐は茶飲み茶椀に茶を注ぎ、茶を啜る様に飲んだ。

嵐が茶を楽しんでいると、響也が起き上がってこちらに向かって来た。

「響也、起きたか」

「兄ちゃん、やっぱりお爺ちゃんみたいだよ」

「いいんだよ。茶を飲んでいると、心が落ち着く」

「本当にお爺ちゃんだ」

「…響也、今日はどうする？」

「今日は…兄ちゃんは何処へ行くの？」

「そうか、俺は冒険者ギルドへ行くぞ」嵐は少し楽しそうに告げた。

「僕もついて行きます」響也はすかさず言った。

「分かった。今から朝飯食いに行ってからな」

嵐たちは食堂で朝食を食べ終え、リーエン亭を後にした。　ギルドは比較的に近かったため、歩いて数十分で着いた。

少し古びた床にカウンターがあり、その手前えにはテーブルがあり、壁際には大きな掲示板があった。中では人で賑わっていた。

「ここがギルド何ですか？」

「そうだ。ここで依頼を受けることができるぞ」

嵐たちはカウンターの方へ歩み寄った。
「すいません。ギルド登録をしたいのですが？」
「はい。では、この用紙に名前などの必要事項を書いて下さい」
嵐は一枚の用紙とペンを渡された。
嵐は黙々と記入した。

名前：アル
年齢：１７
職業：　魔法剣士・・・属性：水

名前は偽名を使おう。年齢はこのままで。職業は魔法剣士と。属性は全属性使えるが、水だけにしておこう。これでいいよな…。

嵐は用紙を渡した。
「これだけでいいのですか？」
「はい。…では、これに触れて下さい」カウンターに置かれていたのは、一枚の小さな鉄板のような物だった。
嵐はゆっくりと、鉄板に触った。
すると、何かが浮かび上がった。

アル・１７歳　　職業：魔法剣士
　レベルＧ

と、書かれていた。手を離すと消えた。

「これは？」
「これはですね、特殊な金属で作られた物なんですね。これを相手に見せて、確認することができます。その裏には冒険者ギルドの

証が描かれています。無くされると、再発行が必要となります。その場合には、銀貨五枚必要となります」

なるほど、無くさない様にしよう。

「お次は、ギルドの説明をさせて頂きます」

「よろしくお願いします」

「依頼を受けるには、そちらの掲示板から受ける事ができます」

嵐たちは掲示板の方へ目線を向けた。

「依頼には、レベルが設定されています。もちろん、冒険者様にもあります。レベルは上からＳＳ・Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｇとあります。一部の例外を除いて、最初はレベルＧからとなっています」

「それだったら、Ｇレベルは Ｇレベルの依頼しか受ける事が出来ないのですか？」

「いえ、御自身のレベルの二つ程でしたら、受ける事が出来ます。御自身より上のレベルの方と、パーティーを組まれた場合、高レベルの方の二つ程上のレベルでしたら、受ける事が出来ます」

「なるほど」

「それと、レベルを上げるには依頼を受けて一定のポイントを上げる方法と迷宮の魔獣のドロップする魔石を売ることでポイントを溜める方法があります。しかし、依頼を達成出来なかった場合、レベルが下がることもあります」

「分かりました」

「分かっているとおもいますが、冒険者への安全性と生死には一切の責任を持ちませんがよろしいですか？」

「はい、分かっています」

「それでは……登録しました。早速ですが、依頼を受けますか？」

「いえ、良いです。今日は迷宮に入ります」

「そうですか。お気を付けて」

嵐たちは踵を返し、ギルドを後にした。

「兄ちゃん。迷宮って何？」

「迷宮はな、神が作ったと、言われている物だ。遺跡みたいな物だな。罠があったり、強い魔物がいたりするぐらいだな。その代わり、運が良ければ、珍しい物が手に入るらしい」

「依頼は受けないの？」

「あぁ、最近の冒険者は迷宮へ良く入るらしい。それに最近はあまり依頼がこないらしいからな」

「そうなんだ。じゃあ、頑張ってね」

「あぁ、頑張るよ」嵐は響也に銀貨を五枚渡したて、嵐は迷宮へ向かうため、響也と別れた。

嵐は《ワープ》で部屋に戻り、支度をした。嵐のウエストポーチから日本刀を出現させた。嵐の特殊能力の一つの『創造』だ。想像した物を出現させる能力。もちろん、この魔法のウエストポーチも嵐が作った。このウエストポーチは何でもいれる事が出来る。便利な物だ。

と、いう事で日本刀を持っていこうと刀を腰に下げて行こうと思ったら、一人の白い髪の美少女が立っていた。

「どうした、ラウ？」

嵐はラウに優しく問いかけた。

「えっとね、私も冒険者になりたくなっちゃったの」

ラウは少し恥ずかしいそうに向いていていた。

「ん？別にいいぞ。でも、早目に言うようにね」

なうん！」

ラウは嬉しそうに首を振った。

嵐はラウの冒険者登録をする為にもう一度、ギルドへ向かって、無事に登録した後に嵐はラウと一緒に〈始まりの迷宮〉に向かって歩き出した。

3話（後書き）

〈属性〉

【四属性】　火・水・風・土

【特殊属性】　光・闇・氷・雷・幻・召

【超特殊魔法】　時・空・重

【特殊能力】　創造など

他にも錬金術などがあります。

魔法を使うには詠唱しなければ、ならない。

特殊能力は詠唱は特に必要無し。

4話

響也は嵐と別れた後、街を回っていた。大通りでは数多くの露店が立ち並び、街の人々はわいわいと賑わっていた。そして、それを見守るように騎士達が街を巡回していた。

「わぁー、ゲームでしか見たことないポーションや剣がたくさん売ってある～」と響也は少し興奮気味になっていた。そのため、しばらくポーションや剣を見ていた。

「あっ、そういえば本を買わないといけなかった」響也は本屋へ行こうと踵を返し、歩き出したら・・・

・・・・ドンッ…ドッサ

横からぶつかられて、地面に尻もちをついてしまった。響也はぶつかられた方を向いていると、数人の人がこちらを見ていた。

そのうちの一人が手を差し伸べて、「大丈夫？」と言った。

「……」響也は驚いていた。そのうちの三人が黒髪で黒い瞳で肌は肌色だった。まさに日本人そのものだった。

響也も日本人だが、今は特殊な指輪のおかげで青い髪に青い瞳に変わっていた。因みに嵐も青に変わっている。

「おーい、大丈夫？」と一人の女にじっと見られていた。

「あっ、はい。大丈夫です」と言いながら、手を取って立ち上がった。

「ごめんな」

「いえ、こちらこそ。すいません」

「おいおい、気を付けろよな」後ろの日本人らしき男に注意された。
「す、すいません」響也は頭を下げた。
「君、そんなことしなくていいよ。こんなバカの言うことなんか無視しなさい」三人目の女が二人目の男を挑発していた。
「誰がバカだ！誰が！」
「分からないの？これだからバカは…」三人目の女はやれやれと言った感じで、応えている。
「このような場所で喧嘩なんてやめて下さい！」一人のお付きの女性が二人の中に割って入った。
「「ふん」」その男女は互いにそっぽを向いた。
「本当、ごめんな」と言って、その団体は去って行った。

その後、響也はその団体についていろいろと聞いて回った。
案外、直ぐに分かった。
彼女らは【勇者】と言われていて、ここの王族達がに呼び出したそうだ。今、結構な数の勇者を呼び出しているようだ。それと、その者達は相当強いらしい。今は訓練を行って、戦争に備えているらしい。
ここまでが今、僕が知っていることです。

そして、僕は古本屋で魔物などの図鑑を買った。以外に高かった。この世界では紙は少し高価な様です。

それから、僕は陽が暮れ始めた頃に宿に帰っていた。僕は図鑑を見ながら、字を覚え始めた。こっちの世界に来てから、力がかなり増して、さらに物覚えが良くなった。だから、とても楽だ。

兄ちゃんと修行して、兄ちゃんに少しは近付いたと思って、組み手をしてもらったけど全然、歯が立たなかった。さすが兄ちゃんだなと思いました。

でも、僕の夢は兄ちゃんを超えることだから、これからも精進していきたいなと思います。

よしっ、晩御飯まで外で体を動かしてきます。

あれ？僕、誰と話していたんだろう？

5話（前書き）

駄文ですが、暖かい目で見て下さい。

お願いします。

5話

嵐たちは〈始まりの迷宮〉に潜っていた。

〈始まりの迷宮〉とはその名の通り、駆け出しの冒険者が入る迷宮だ。この迷宮は比較的、弱い魔獣しかいない。ランクでいえば、Dランクだ。だが、三十一階層から魔獣が強くなるので、注意が必要だ。この迷宮を攻略しなければ、冒険者として成功しない。

嵐たちは潜って、一時間で三十一階層まできていた。これは驚くべき早さだ。普通の冒険者なら、一時間で五階層程だ。

嵐たちが急いで来たのは魔獣が強くなる程、魔石の値段とポイントが高くなる為、三十一階層まで来たのだ。これまでの魔獣と同じだが、強さがかなり違った。だが、それは普通の冒険者で、嵐たちにとっては今までと同じように感じていた。

この階層からの冒険者は最低でも四人程のパーティーで行動していた。それに対して嵐たちは二人だったため、他の冒険者からは「無謀だな」などと、言われたが嵐たちは気にしてはいなかった。

嵐たちはゴブリンやキラーバットなどの魔獣を大量に倒していた。その数は千にも達しようとしていた。

そのようにして、最下層の五十階層までやって来た。

「やはり、弱かったな」
嵐は退屈そうにしていた。
「アラs…じゃなくて、アルにとってはそうですね」
「他の駆け出しの冒険者の前で言ったら、睨まれそうだな」

などと、言っているうちに大きな広場が見えた。近付いて行くと、中心に大きなスライムが現れた。

「スライムキングか…」
そう呟いた後、嵐たちは武器を構える。嵐は一メートル五十センチ程の刀をラウは二本のダガーを持って、構えている。

そして、嵐たちはスライムキングに向かって駆け出した。まずは、ラウが攻撃を繰り出した。スライムキングが繰り出す無数の触手を全て、切り刻んでいる。そうして、後ろから嵐が跳び上がり、スライムキングの核を真っ二つに切り裂いた。

核が真っ二つになったと同時にスライムキングの体が溶けて、魔石と何かの塊があった。
ラウは拾い上げた塊をジロジロと見ていた。

「アラシ、これは何だろう？」
ラウは塊を見せてきた。
「それはミスリルだな」
「へ～、これがミスリルかぁ」
塊をジッと見つめているラウを見て、嵐は見守るかのように立っていた。
「それじゃあ、帰ろう」

嵐は動きそうに無いラウにそう言って、広場の奥にある魔法陣に向かった。

嵐たちは魔法陣に乗って、迷宮の入口に戻った。
それから、迷宮の前にいるギルドの人達に挨拶をして、魔石などを売るためにギルドへ向かった。

嵐たちはギルドの中へ入った。
そして、登録して貰った、ギルドの女性のところへ向かった。
「すいません」
「はい、何でしょうか？」
変わらない、営業スマイルで挨拶された。
「魔石を換金してもらいたいのですが」
「はい、大丈夫ですよ」
嵐は魔石の入った袋を渡した。
「…沢山、取られましたね」
女性は驚いていた。はっ、と思い出したように「暫くお待ち下さい」と言って、奥の部屋に入って行った。

そして、十五分程経って、袋を持って戻ってきた。
「大変、申し訳ありません」
と深々と頭を下げられた。
「気にしてませんから、えっと…「アリアです」アリアさん大丈夫ですよ」
「ありがとうございます」
アリアさんは少し頭を下げた。
「それでは、今回は黒魔石が８２個と青魔石が２４個と黄魔石が一個なので金貨一枚と銀貨一枚と銅貨五枚です。後、今回の魔石で

Gレベルから Fレベルになりましたのでカードの方もご確認下さい」
嵐はアリアから渡された袋とギルドカードをよく見た。
「確かに」
そう言って、ギルドを出て行った。

そのまま、宿に帰って恭弥と少し組み手をした後、黒髪・黒い瞳の少女たちの話をして、一日を終えたのだった。

5話（後書き）

〈魔石〉

黒＜青＜緑＜黄＜赤＜白＜金

黒魔石・・・青銅貨五枚

青魔石・・・銅貨一枚

緑魔石・・・銅貨五枚

黄魔石・・・銀貨五枚

赤魔石・・・金貨一枚

白魔石・・・金貨五枚

金魔石・・・聖金貨一枚

6話

今日も外は快晴であった。
嵐は外を見て、体一杯に日を浴びていた。
「いや～今日もいい天気だね」と、言いながら、両手を大きく横に伸ばしていた。

そこへ恭弥が起きてきた。
「兄ちゃん。おはよう」
恭弥は少し眠そうに言った。

「ああ、おはよう」
嵐もそれに応えた。

「あ、そうそう」
嵐はウエストポーチから徐に何かを取り出した。

そして、それを恭弥とに渡した。
「これは？」と聞き返した。
「それは学校の俺自作のパンフレットだ」

「僕は学校へは行きませんよ」

「まぁ、一応見ろよ」

恭弥とはその嵐のパンフレットをパラパラと読んでいた。
パンフレットの終わり頃、響也はあるものに見入った。

それは…ロボットだった。盾や剣を持った、鉄の巨人だった。

「これは何？」恭弥は興味津々に聞いてきた。

「ん？それはな、魔道騎士だ」

嵐はお茶を飲みながら、言った。

魔道騎士とは人に似せた魔道兵器のことだ。

魔道騎士は高さ数十メートルもあり、武器は主に剣や槍を使っている。

魔道騎士は稀に魔境から襲撃して来る魔物を迎撃するための魔道兵器として開発された。この魔道兵器を乗りこなすことで単騎で騎士百人以上と戦う事が出来る。

そのため、この魔道騎士は各国の主戦力になっている。

「凄い、カッコいい」

恭弥はそれをジット見ていた。

「乗りたい」

「でも、もう入学届けの提出期限がすぎてる…」恭弥は肩を落とした。

嵐はそれを見て、ふっふっふと笑っていた。

そして、嵐は一枚の紙を出した。

「それは？」恭弥は紙を凝視した。

「これはな、お前の入学届けだ」

嵐は紙を恭弥の顔の前に突き出した。

恭弥は「えっ？」と驚いた。

「きっと、行きたがるだろうと思って、入学届けを貰ってきたんだぞ」

「お兄ちゃん…ありがとう！」

恭弥は嵐に勢い良く抱きついた。嵐は倒れそうになったが、受け止めることが出来た。

「どう致しまして。それより、試験に向けて勉強しないとな」

「うん。分かった。頑張るね」

「あぁ、頑張れよ」

そう言うと同時に恭弥は部屋を出て行った。

「やれやれ。行動が早いこと」と、嵐はパンフレットを拾いながら言った。

「まぁ、俺も乗りたいなと思うけどな」

「私も乗りたいな」

突然、ラウが後ろから首に抱きついた。

「そうか。また、今度な」

「うん」と、ラウは頷いた。

「じゃあ、今日も迷宮に入るか？」

「アラシの好きにしたらいいよ」と、ラウがにこりと微笑んだ。

「それじゃあ、行きますか」

そう言うと、二人の姿は部屋から消えた。

～迷宮内～

嵐たちはこの都市最大の迷宮へと来ていた。この迷宮はまだ攻略されておらず、現在は４３階層まで攻略されている。

どこの迷宮も石の壁ばかりで死角のなる場所が多い。そのため、曲がり角で鉢合わせになることも少なく無いらしい。

嵐たちは現在、３階層で多数のキラー・ビーと交戦していた。

ドォォォォン…

だが、キラー・ビーの群れを嵐の火炎魔法で一瞬で呆気無く燃え尽きてしまった。

「さすが、アラシだね」

「この程度なら、楽勝だ」
そう応えるとまた奥へと進んで行った。

その後も順調に進み、８階層まで来ていた。
「ここは広いな。ここまで来るのに結構な時間がかかったな」
「でも、普通の人に比べると、早すぎますよ」
「そうだな…ん？何かくるぞ」
嵐たちの前方を見ると、数十人の冒険者たちが走って来た。その姿は何かから逃げているようだった。
その冒険者の中に一際目立つ、金色の鎧を着ている者もいた。
「おい！何があった！」
「オーガの群が来やがったんだ！それで奴隷を囮にして逃げてきたんだ」
「おい！何してる。早く逃げるぞ！」
それだけ言うと、団体さんはさっさと逃げて行った。
「ラウ。行くぞ」
嵐はラウを連れて、多数の気配がある場所へと走りだした。

〜？？？〜

「…はぁ……はぁ……」
私は今、棍棒を持った大きなオーガに囲まれていた。
こんな状況になっているのはあのバカ貴族の奴隷になり、バカ貴族が調子に乗ってバカ騒ぎをしたせいだ。

「…はぁ…ちっ、くらえ！」
オーガの攻撃を避けながら、剣で足を斬りつけた。
「ガァァァッ…」
オーガが苦痛で叫んだ。

「はぁ…はぁ…がっはッッ！！」
後ろから殴られ、壁に打ち付けられた。

「くそっ…体が…動か…ない…」
私はここで終わるのか？

魔族だからといって、私の父や母…一族を殺されて…女、子供は奴隷にされて…

「…死にた…くな…い」
何かが頬を伝った。

「なら、助けてやろう」

……　シュッ……ドッサ…

私の前には一人の男が立っていた。

～嵐～

嵐たちは物凄い速さで走っていた。

「ここの迷宮は道が歪だな。時間がかかる」

「でも、もう着きますよ」

ラウがそう言うと道が開けて、広場へ出た。

そこには多くのオーガで埋めつくされていた。

「どうすれば、ここまで集まって来るのでしょうか？」

「そんなことはいい、あの中にいるのを助けるぞ」

嵐たちは走り出し、群がっているオーガを倒していった。否、虐

殺した。
オーガたちは嵐たちの存在に気付くも嵐たちの動きについていけず、なす術もなく打倒されていった。
数にして、５０体以上のオーガたちが１分もかからず倒された。
そんな突然の事実に目の前の女は何が何んだかという表情でこちらを見ていた。

「おい、大丈夫か？」

「ッッ！」

「ああ～、肋骨とかやられてるのか？」
嵐はそう言いながら、女の体に触るように手を添えた。
女は何か言うように口をパクパクしている。
嵐の手からは淡い光が放たれる。そうしていると、女の子の傷がじわじわと消えて行き、完全に回復した。

「はっ」
女は回復したと同時に剣を嵐に降ろした。
だが、何も無かったように嵐は剣を指二本で受け止めた。
「くっ！！」

女は顔を顰めた。

「…スティール・チェーン」

嵐がそう呟くと何所からともなく、鉄の鎖が出現し、女を縛り上げる、

「??」

女は何が起きたか分からず、惚けた表情をした。

「助けた恩人に剣をくれるとはどうしてだ?」

「お前が人間だからだ!お前たち人間が私たち魔族を殺し、奴隷にしたからだ!」

「そうか…」

嵐は顎に手を当て、何かを考え込んだ。

今から数年前、帝国が勇者たちと魔族との戦争があった。

魔族も抵抗をしたが、魔王を勇者たちに倒され、降伏という結末で終わった。

その後の魔族たちは奴隷にされる又は迫害されていった。

人間の中には魔族への迫害や奴隷制度を訴える者もいたが、ことごとく潰された。

この女も奴隷にされたのだろう。

女は変わらず、こちらを睨みつけてくる。

「まぁ、そんなに睨むな」

「・・・・」

「はぁ～、どうするかな？」

嵐は考えていた。この女をどうするかと。

「…何故…？」

女は俯きながら呟いた。

「ん？」

「何故…私を助けたのだ？」

「何となく？」

「魔族なのに？」

「そんなの関係ない…お前が死にたくないと言ったからだ」

そう言うと女は鎖から解き放たれ、地面に座り込んだ。

～？？？～

女は思った。

私は魔族だからといつも蔑まれ、罵られたり、殴られたりした。

でも、この人は人間、魔族関係なく、私を見てくれるようだ。

私はいつも、寂しく、恐怖して生きてきた。

寒くてもいつも一人だった…

人間を見ると恐怖が募った…

私はこの人が愛おしく思えた。

「お前はどうしたい？」

彼は優しく私に声を掛けた。

私は顔を上げ、彼の顔を見た。

「お前が良ければ、一緒に行かないか？」

彼は穏やかな笑みを浮かべ、手を差し出した。

私は自然と彼の手を取り……泣き出した…。

6話（後書き）

～魔物～

［キラー・ビー］
・体長５０センチ程で蜂の姿をしている。
・攻撃方法は尻の先の針で攻撃する。
だが、キラー・ビーには毒を持っていないので刺されても痛いだけである。
・数十匹の群で行動している。
・単体のランクはＦランク。
・群れの場合はＥランク。

［オーガ］
・体長２メートル後半程で人の体型をしている。
・オーガは力は強いが動きはあまり速くない。
・一匹で行動しているのが多い。
・単体ではＤランク。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6288x/

また異世界へ

2012年1月11日00時54分発行